

オレンジ色の屋根にゴツゴツしたドイツ壁—このような外観をデザインしたのは東京の、あめりか屋—という日本初期の西洋住宅専門会社で、百年経った今でもこの屋敷は大変モダンで美しいと多くの人が言われています。

およそ百年前に、川上貞奴が福沢桃介のビジネスパートナーとして数年を過ごしたこの屋敷は、建築された当時は周りの人々から「二葉御殿」と呼ばれていました。当時の東二葉町(名古屋市區白壁3丁目)という場所に建築され、現在は同種木町3丁目に移築復元されています。

今日、私達はごく自然に電気の恩恵を受けていますが、その当時はこの家屋に電球がつるくらいでした。ところがこは、すべての部屋に素敵な照明器具が設置されており、さらに外観を照らすライトもあつたようなので、この屋敷全体が光り、特に大広間にある大きなステンドグラスは夜になると色とりどりに輝いていた様子が想像できます。また屋敷の中には大きな配電盤があり、今でもこの文化の



夕方の二葉館(正面より)

のみち二葉館に展示されています。それを見ると屋敷中に配線をめぐらして電気をふんだんに使っていたことが分かります。街灯もほとんどない暗い夜、小高い丘の上に立つこの明るい屋敷はさぞ際立っていたことでしょう。現在の風景からは想像もつかないかもしれません。百年前は、この名古屋市區のあたりは田畑が広がりに随分素朴な景色だったことが、当館1階の和室に展示された衝立からうかがえます。

当館の近隣には、陶磁器貿易商・井元為三郎の住まいだった文化のみち種木館や発明王・豊田佐吉の弟で実業家の豊田佐助の屋敷旧豊田佐助邸など他の豪華な屋敷も点在しています。が、この二葉御殿にこれほどの外観がつけられた理由は、川上貞奴と福沢桃介による政財界人の社交の場所、また、電気のショールームとしての役割もあつたようです。

私たちが百年前にいざなつてくれる—そんな—文化のみち二葉館へいちど足を踏み入れてみてはいかがですか。

二葉館あれこれ Vol.13

“二葉御殿”と呼ばれたお屋敷、その外観と役割



舞台衣装

唯一現存する舞台衣装が、成田山貞照寺の縁起館に保管されている花魁の内掛けです。二葉館1階には薙刀と共にそのレプリカが展示してあります。どの舞台で使われたものかは不明ですが、豪華な刺繍が印象的です。貞奴は晩年まで舞台衣装を大事に持っていたとのことですが、東京の空襲で残念ながら焼けてしまったそうです。

花魁といえば、貞奴が花魁に扮する「鞆当て」という演目は海外公演でも評判でした。貞奴の衣装の美しさも大変好評で、着物のデザインを模して「ヤッコドレス」として流行したほ

薙刀もオリジナルは貞照寺に保管されています。こちらは「深山の美人」という演目で使用された小道具です。綾羽という娘役を演じました。縁起館にはその写真と共にオリジナルが展示されています。



二葉館では貞奴に関する資料の展示をしています。今回は衣装の展示から

「女優貞奴」として花開いた時代を紹介しています。

道成寺

写真はニューヨーク・ブロードウェイで撮影された「道成寺」の衣装を身に着けた貞奴です。この演目は娘の姿から次第に恐ろしい大蛇になつていく様子を舞踊で演じるものです。アメリカでの波乱を乗り越えて、飲まず食わずの状態最後のチャンスと挑んだボストンでの公演では、空腹のために気絶しながらも「道成寺」を気合で踊りきる貞奴の姿が、迫真の演技と大絶賛されました。のちに音二郎によつて「鞆当て」と「緒にアレ

うたる芸術家に影響を与えました。欧米での公演で、まさに貞奴の代名詞ともなった演目でした。



文化の ぐらりさんぽ ⑬

旧川上貞奴邸と跡地周辺



旧川上貞奴邸跡碑

二葉館から北西へ徒歩約10分、国道41号線の清水口交差点から脇道へ一本入った場所が、旧川上貞奴邸の跡地(現：白壁3丁目)です。現在はマンションになっていますが、敷地南西の角には貞奴邸跡地の碑が建てられています。

大正6年、貞奴は、葉種問屋の中北伊助が所有していた土地を購入し、大正7年には、あめりか屋によつて、貞奴邸の建設が始まりました。貞奴は後に、隣接していた真弓牧場と山内製壘所、松本硝子工場土地も購入しており、ここには、使用人の家屋とあめりか屋の名古屋臨時出張所が建てられたそうです。製壘所とは、あまり聞きなれない言葉ですが、硝子の瓶や器を作る工場のことです。この工場では、投薬瓶などが製造されており、貞奴邸の跡地からも、当時の硝子瓶が見つかっています。今では閑静な住宅地になっていますが、元は牧場や工場があるほどの広々とした場所だったとは、驚きですね。

更に、貞奴は、西側の土地や畑も購入し、そこには借家や、貞奴が経営していた川上絹布株式会社の子会社で建てられました。貞奴が所有した土地は、約4400坪にも及んだといわれています。

貞奴邸の道を挟んだ北側には、中央玻璃器製作所という硝子工場がありました。



大正14年頃の貞奴邸周辺(「山吹ものがたり」より)

旧川上貞奴邸の周辺は、歴史的にも魅力的な場所です。皆さんも散策してみてください。

(協力なごや歴史ナビの会・伊藤喜雄)

中央玻璃器製作所の跡地から東に向かうと、真言宗の長久寺があります。総門は、元は清須城の城門だったといわれています。不動尊を信仰していた貞奴は、名古屋を離れる際に、邸内で祀っていた不動明王像を長久寺に寄進しました。

from Archive 書庫棟から

詩人・金子光晴



金子光晴が名古屋に住んでいたのは、幼少期のほんの数年のことでした。明治28(1895)年に、現津島市の大鹿家に生まれた光晴(本名安和)は、実父が稼業を畳んだことによつて、2歳で名古屋に引越し、当時、建設業清水組の名古屋出張店主任だった金子莊太郎・須美夫妻の養子となりました。その後、5歳の時から、養父の転勤で京都、東京へと転々とした光晴にとつて、故郷・愛知とのつながりは希薄なものだったようです。「僕は、金子という家の人となつてしまったので、今日までも、その本家とは無縁であるし、したがって、ふる里という実感もあまりぴつたりとこない」(金子光晴『這えば立て』より)と記したように、故郷を懐かしむ思い出もなく、自身には縁遠いものと感じていました。

同時に「僕の先輩、同輩のだけ彼がみなふるさともあり、ふるさとの人とゆききをするのを見て、羨ましかったものだ」(同)と、周りと違って故郷や同郷の知人を持たない自分に寂しさもあつたようです。

二葉館では、2月からの企画展で、「流浪の詩人 金子光晴展」を開催します。大



撮影 峠 彩三(木村 宇宙野草)

展示では、金子光晴の詩集や紀行文、直筆原稿、また波乱万丈な生涯についてもご紹介いたします。皆様、ぜひ楽しみにしてください。

他にも、名古屋のモダンズム詩人・井口蕉花と交流を深め、蕉花や春山行夫らが創刊した同人詩誌「青騎士」に寄稿したり、名古屋詩人連盟が主催した講演会では、同じく津島市出身の詩人・野口米次郎と共に壇上に立っていたり、詩人としての光晴と名古屋との関わりは、それほど縁遠いものではなかったようです。

展示では、金子光晴の詩集や紀行文、直筆原稿、また波乱万丈な生涯についてもご紹介いたします。皆様、ぜひ楽しみにしてください。

15(1926)年に、詩集『水の流れ』を刊行しました。

他にも、名古屋のモダンズム詩人・井口蕉花と交流を深め、蕉花や春山行夫らが創刊した同人詩誌「青騎士」に寄稿したり、名古屋詩人連盟が主催した講演会では、同じく津島市出身の詩人・野口米次郎と共に壇上に立っていたり、詩人としての光晴と名古屋との関わりは、それほど縁遠いものではなかったようです。

展示では、金子光晴の詩集や紀行文、直筆原稿、また波乱万丈な生涯についてもご紹介いたします。皆様、ぜひ楽しみにしてください。